



ベスト・ロングセラーの絵双六化

弥次さん、喜多さんが滑稽な失敗談を繰り返す、十返舎一九作『東海道中膝栗毛』は、江戸時代におけるベストセラー、ロングセラーの代表でした。初編は享和二年（1802）に刊行されましたが、人気が出て次々と続きが出されることとなりました。『東海道中膝栗毛』の八編まで、及び発端部分が刊行されて終了したのが文化十一年（1814）でした。一方『続膝栗毛』の刊行が文化七年に始まり、文政五年（1822）まで続けました。およそ二十一年間の長きにわたって続いたシリーズといえます。

『東海道中膝栗毛』『続膝栗毛』はいずれも弥次・喜多の滑稽な道中のありさまを活写していくものですが、旅の話であることが読者にとっては大きな魅力であったことでしょう。一方道中双六は、旅の形式を踏まえて作るものから、この作品は格好の素材となったものと思われま

実際、『東海道中膝栗毛』を素材として作られた絵双六は、現在二十種類余が残されており、その人気のほどを偲ぶことができます。本館所蔵の『五十三駅滑稽道中図絵』は其中でも制作された時期が早いものと考えられ、天保から嘉永年間（一八三〇～一八五四）の頃と考えられています。

東海道五十三駅を道中双六に作ると、東海道をって最後は京で「上り」となります。しかし『東海道中膝栗毛』は東海道を四日市まで行ったあと、お伊勢参りに行きますので、東海道を逸れて行きます。そこで『五十三駅滑稽道中図絵』では原作通りとはせずに、四日市の後は東海道を旅して行く形に変えているのです。



絵

双六

で

めぐる

旅

東海道

五十三

駅

〽

この絵双六の作者は、原作を尊重しつつも、原作の表現をそのまま使うことは極力していません。会話文も原作とは異なるものが殆どで、双六の小さな画面の中に表現できるように作り替えています。原作にも挿絵がありますが、五十三次全てについてあるわけではありません。そこで絵双六の作者は、原作から弥次・喜多の滑稽な場面を選び出し、独自に絵を描いています。また別の土地でのエピソードを活用している様子も見受けられます。さらに原作の挿絵を利用する場合も、原作通りではなく、手を加えています。

ここが絵双六作者の腕の見せ所ではなかったでしょうか。絵双六は原作を素材として、それに寄りかかるようにも見えますが、絵双六として成立するために、周到な工夫を施していたことが分かるのです。

(東京学芸大学 日本語・日本文学研究講座 教授 黒石陽子)



『五十三駅滑稽道中図絵』三島



『五十三駅滑稽道中図絵』四日市